

最後の革命？

アラン・バティウ
訳・解題 松本潤一郎

164

なぜ？^①

なぜ今、一九六五年から一九七六年にかけての、中国共産党内部の深刻な障害に満ち満ちた歲月の公式名称である「文化大革命」について語るのか？ 少なくとも三つ理由がある。

第一に、まず文化大革命は全世界の活動家、ことフランスに限っていえば、少なくとも一九六七年から七六年にかけての活動にとつてつねに参照される、躍動感あふれる運動だったからである。文化大革命はわれわれの政治史の一部であり、六〇年代から七〇年代にかけて唯一真に創造的運動であったフランス毛沢東派の潮流を生んだ。わたくしには「われわれ」と言うことができる。わたくしは毛沢東派であったし、詩人アルチュール・ランボールの言葉を借りれば、今でも「俺は、そうである、俺は永遠に、そうである」と言うことができる。あらゆる種

類の主体と実践の軌跡は、中国の革命家たちの倦むことを知らぬ創発性の中に、おのれに相応しい名称をみいだした。主体性を変革し、別の仕方で生き、別の仕方で考えること、すでに中国の人びとは——それに呼応してわれわれは——、それをこそ「革命する」と呼んでいたのだ。彼らは言った、「人びとの魂にふれる」と。政治的実践においてはつねに、旧弊な世界観もまたつねにわれわれの中に現前するがゆえに、人は同時に「射手にして獲物」でなければならぬ。そう彼らはわれわれを論したのである。六〇年代末期、われわれはいたるところに下放していった。工場へ、都市へ、農村へと。数万の学生がプロレタリアになり、労働者の寝泊りする簡易宿泊所で暮らした。これらを指し示す言葉もまた、文化大革命は持っていた。「自己変革」、「人民への奉仕」、そして永遠の本質である「民衆との結合」。われわれは闘った、フランス共産党の野蛮な不毛、その暴力

的な保守主義に抗って。中国でも党の官僚体制が攻撃され、それは「修正主義に対する闘い」と呼ばれた。潮流を違える革命諸派のあいだの分裂や紛糾ですら、中国風に言えば、「黒幕をあぶりだすこと」、「外見上は左翼、実質的には右翼」である連中と決別することだった。例えば工場ストライキ、簡易宿泊所のファッショ的管理人との対峙といった民衆政治の状況に乗りだしたとき、われわれは学んだ。「プロレタリア左派を見つけだすことにかけては他の追随を許さず、中道を味方につけ、右派を孤立させ、叩き潰す」必要がある、と。われわれを導いたのは毛の『赤色小冊子「毛主席語録」』だった。ドグマを説いて回ることを目的とするなどといった、莫迦どもの言う理由からでは全くない。正反対に、以前にはわれわれの与り知らなかった、まったくこじれた情況の出現の中で、われわれに無数の新たな方法を説明させ、発明させてくれたからだ。こうしたこと的全过程について——おのれの活動放棄を隠蔽し、錯覚の心理学だの過誤を犯した道徳精神だのに依拠して既成の反動に賛意を表する連中のことではなく——、われわれには、われわれの拠りどころであったあれらの文書群を引用して、中国の革命家たちに敬意を表することしかできない。

第二に、文化大革命は、党一国家形式を飽和させる政治的経験の、典型的事例（これも毛派の言葉であり、個

別の情況を超えて普遍化さるべき、革命の過程における発見を意味する）だからである。「飽和」というカテゴリーを、わたくしはシルヴァン・ラザルスがこの言葉に与えた意味を込めて使用する。すなわち、文化大革命は、座礁しつつある党一国家（この場合は中国共産党）に依然として内在する、きわめて重要な最後の政治的継起（レクイエム）である。わたくしはこのことを論じるだろう。すでに六八年五月およびその帰趨が導きだされたが、これはやや別の事態である。ポーランドやチアパスの運動、これはまた別の事態である。（ト）政治組織（オルガニゼーション・ポリティック）、これは断固として別の事態である。但し、六〇年代から七〇年代にかけてのこの飽和なくしては、党一国家の亡霊を除いて、なお、何も思考することはできないだ

- (1) 本テキストは、2001年、ナターシャ・ミシェルと、わたくしアラン・バディウが主宰するルージュ・ゴルジュ大会に触発されて生まれた。
- (2) Sylvain Lazarus, *Anthropologie du nom*, Paris, Le Seuil, 1996, p.37. [日本語訳なし]
- (a) フランス語原文を直訳すると「人間をその根底から変える」とでもなるが、東方書店出版部編、『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第1巻、1970年、所収の「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定 1966年8月8日採択」では「人びとの魂にふれる」と訳されている。強調は引用者。
- (b) 1980年代に起きた労働者の連帯によるポーランド民主化運動、および1990年代半ばから続く、メキシコはチアパス州におけるサパティスタ民族解放運動を指すと思われる。
- (c) 「政治組織 L'Organisation politique」は、バディウ、ナターシャ・ミシェル、シルヴァン・ラザルスが結成した政治運動。国家装置に収斂しない新たな組織を模索しつつ、「不法滞在」労働者と共闘しつつけるも、2007年、解散。同組織の基本方針について、アラン・バディウ、「政治を語る、政治について語る」、拙訳、『現代思想』36(1)、2008年、青土社、を参照。

ろう。^③

第三に、文化大革命は、歴史および政治についての、政治から出立して考えられた歴史（逆ではない）についての、一つの偉大な教訓だからである。事実、支配的な歴史記述に従って、或いは一つの現実的政治の継起から出立して、この「革命」（この語自体が飽和の真っ只中にある）を検証してゆくなら、驚くべき無数の不調和が出てくる。ここで重要なことは、この不調和の本性が、確実性または不確実性をめぐる経験的ないし実証主義的記載の中には存在しないという点を、よくよく見究めることである。諸々の事実があったことに対して、われわれは同意する。そして、「公式の歴史が下す」諸々の裁きとは正反対の裁きを下すことにも、吝か^{やぶ}ではない。まさしくこの逆説こそが、われわれの議論の端緒として役立つ。

叙事譚^④

支配的な史料編纂（歴史記述）上の説明は、様々な専門家、とりわけ一九六八年以降は中国研究者によってまとめられており、その後、変化していない。この説明は、一九七六年以降、鄧小平を頭に据え、文化大革命を命かけながら生き延び、文化大革命に対する報復に燃える連中が支配してきた中国國家の公式見解となったものによつ

て、打ち固められている。

この説明は何と言っているのか？^④ 曰く、革命に関して言えば、あれは國家―党官僚幹部たちの内部での権力争いだった。曰く、「大躍進」なる標語に体现され、農村に再び飢饉を招くことになった、毛の経済政策における主義主義の完全な失敗だった。曰く、この失敗のせいで毛は党上層部内少数派となり、いわゆる「実権派」の劉少奇（当時の國家主席）、鄧小平（党総書記）、彭真（北京市長）といった主立った人物に法規処分を課された。曰く、一九六三年以降、毛は反抗勢力を組織しようと試みるも、党の正規上層部内で失権した。曰く、そこで毛は党の内外を問わず、諸々の異質勢力（紅衛兵の学生たち）、とりわけ軍部に訴えて反攻を謀り、彭德懷（当時の国防部長）を斥けて林彪を国防部長に任命した。^⑤ 曰く、再び権力をわが手にしようというただそれだけの理由から、毛は混迷と血まみれの情況をつくりだし、この大罪の張本人である毛が死ぬ（一九七六年）まで、世情に安寧が齎されることは決してなかった、と。

かかる見解には、厳密に言つて不正確な点は一つもな^いと請合つてもよい。但し、この見解は、これらの史実に對して、今日もお躍動にみちた一つの思考を通して授けられる政治的理解が与える真の意味について、まったく捉えそこなつてもいる。

第一。いかなる安寧もなかった？ 然り。だがそれは、政治的な新しさが、党—国家の枠組の中では展開されなかつたというだけの話である。学生および労働者大衆の最も広範に及んだ創造的自由（六六年から六八年にかけて）でさえもが、軍によるイデオロギーのおよび国家的統制（六六年から七一年にかけて）でさえもが、敵対勢力がぶつかり合う執行部で断続的に行われた諸問題の解決（七二年から七六年にかけて）でさえもが、革命の掲げる諸々の理想が確立され、ソ連を模範とした政治から完全に切り離された一つの全く新たな政治情況がついに集合的規模で日の目を見るに至つたということ、認めようとはしなかつたのである。

第二。諸々の異質勢力に訴えた？ 然り。だがこの訴えは、党および国家の齟齬紛糾からの部分的脱出を目的としてなされたのであり、また事実——中期的にも短期的にも、そして今日なお——効を奏したのである。そもそも、一つの巨大な運動の持続の中で問われていたのは、官僚的形式主義の撤廃だつたではないか。これと同時に諸分派のアナキー状態が引き起こされたということとは、やがて来る時代の本質的な政治的問いを指し示している。すなわち、国家という形式的な統一性または単位によってじかに保証されるのでなければ、いったい誰または何が、一つの政治の統一性または単位を打ち立て

るのか？

第三。権力争い？ 自明である。そもそも権力争いを「革命」に対置させること自体が莫迦げている。やつらは「革命」という言葉を、権力問題をめぐって敵対し合う政治的諸勢力の腑分けとしか、理解していないのだから。もつともレーニンにとって革命の問題が最終的には権力の問題であつたことは明白であり、毛派は絶えずそのレーニンを引いていたわけだが。きわめて複雑な真の問題はむしろ、文化大革命が政治と国家を腑分けするという革命的構想とまさしく決別していかないかどうかを、知ることである。事実、これが文化大革命の大きな問いだつたのであり、その中心のかつ暴力的な論争の場だつたのである。

第四。「大躍進」が無残な挫折に終わった？ 然り、様々な視点からそう言いうる。但し、この挫折はスターリンの経済政策教義をめぐる一つの危機的試練に由来する。それは「全体主

- (3) 20世紀の諸々の政治の中心的形象としての（諸）国家—（諸）党については、ルージュ・ゴルジュ大会でシルヴァン・ラザルスが発表した「世紀の諸体制」を参照することができる。
- (4) 文化大革命についての公式的または「批判的」な諸見解（奇妙にもこの一度の「批判」のみで承認された）に一般的スタイルを与えた書物は、Simon Leys, *Les Habits neufs du président Mao*, LGE（シモン・レイ、『毛沢東の新しい制服』、緒方君太郎訳、現代思潮社、1973年）である。
- (5) これらの挿話、およびより一般的なこの時期の基本的事実について、本論末尾の年表を参照されたい。
- (d) 以下、文化大革命の「歴史」を総括するにあたり、バディウが“histoire”（歴史・物語）ではなく「叙事譚」と訳した“récit(s)”なる語を用いるのは、それが支配的歴史記述による「公式の歴史」とは区別されるからである。

義」によって各地農村の発展に関する諸問題を統一的に扱おうとするものでは全くなかったのだ。毛はスターリンの集団化政策を、そしてスターリンの農民に対する度し難い軽蔑を、厳密に検証している（そのことは多くの注釈が証していよう）。毛の理念は、あらゆる犠牲を払って都市への一極集中を保証するための暴力的かつ強制的なやり口による集団化では、全くなかったのだ。それは正反対に、各地農村をその場で工業化することだったのであり、ソ連の破局を徴候的に示していた野蛮なプロレタリア化（労働力の商品化の強制）と都市化を避けるような仕方でも、各地農村に、ある相対的な経済上の自律を与えることだったのである。事実、毛は都市と農村の矛盾を効果的に解決する共産主義の理念に従ったのであって、都市を優位に据えて農村を暴力的に抹消する政策に従ったのではない。もし失敗があるとすれば、それは政治の性質に関わる失敗であって、スターリンの失敗とは全く別の失敗である。

日付

日付に関しても明らかに同様のことが言える。中国國家のそれでもある支配的見解に抛れば、文化大革命は一九六六年から一九七六年までの十年、紅衛兵の登場から毛の死までの間、継続された。災厄に満ちた十年、合理的發展からみれば失われた十年だった、というわけだ。

実際、中国國家の歴史観から、市民の安全、生産、管理職幹部の然るべき統一性、軍の結束などといった規準を以って検証すれば、この日付を擁護することもできよう。だがこれらはわたくしの採用する公理ではなく、わたくしの採用する規準でもない。政治または政治的發明という視点から日付の問題を検証するならば、決定的に重要な規準はこうなる。すなわち、政治に関わる集團的思考の創造を、どの時点に位置づけることができるのか？ これである。実践および諸々の標語が中國黨一國家の伝統と機能に対して過剰であることを、確かめることができるのか？ 普遍的価値を持った言表群が生起するのはいつなのか？ そのとき、「國家の公式見解とは」全く別の仕方でも、われわれ（フランスの毛沢東主義者）の間ではGRCPと呼ばれていた、「プロレタリア文化大革命」という名を持つ過程の里程碑が、打ち固められるだろう。

わたくしに関して言えば、こう述べておきたい。この

意味での文化大革命は、一九六五年一月から一九六八年七月までを以って、一つの継起を形成している、と。いわゆる革命の時期を一九六六年五月から一九六八年七月の間に位置づける（これは政治技術上の議論だが）という根本的限定をすべし、わたくしは認めてもよい。この規準は、一つの集団的政治活動、その標語、その新たな組織化、それら固有の場の存在にある。これらを横断することによって、ある両面的な、とはいえ疑う余地なき、この名に値する同時代的政治の思考への一つの参照枠が構成される。この意味で、「革命」があるのは、紅衛兵、革命的労働者の叛乱、おびただしい組織、そして「拠点」、全く予断を許さぬ情況、新たな政治的言表、前例なき文書群、等々があるその限りにおいてのことである。

仮説

この（「文化大革命という」）巨大な地割れが思考に曝され、今日において意味をなすためには、どうすればよいのか？ わたくしは一つの仮説を提示し、この仮説を、またその継起（すなわち一九六五年一月から一九六八年七月にかけての中国）を、事実に関するものであれテキストに関するものであれ、様々な次元で実験・検証する。

仮説は以下のようなものである。われわれは、党／国家（一九四九年以降に権力を掌握した中国共産党）という一つの本質的分割が課す諸条件の中にある。この分割が本質的であるというのは、それが国家の生成に関する決定的な問いに関わるからである。すなわち経済、都市と農村の関係、軍の事実上の変質、朝鮮戦争の収支、知識人、大学、芸術、文学、そして最後にソヴィエトまたはスターリン的モデルの価値、等々の多様な問いである。しかしまた、この分割がとりわけ本質的であるのは、党幹部内少数派が、歴史上最も偉大な、そして民衆に支持された正統性を戴いた者、すなわち毛沢東によって管理され、代表されていたからである。党の歴史的経緯（日本、次いで蒋介石に対する長期に及ぶ人民戦争）と、国家権力の骨組みとして活動する党の現状との間には、おそろべき不一致がある。少なくとも文化大革命の間、とりわけ軍において、延安の時期^(e)が、共產主義的政治主体のモデルとして、つねに参照されるだろう。

この不一致は、以下の帰結を導きだした。すなわち、諸々の立場の対立は、官僚型形式主義が課す規律によっては規範化されず、もとよりスターリンが三〇年代に大いに利用したテロリズムの肅清（純化）の方法によっても納まりはしなかった。ところで党／国家の空間には、形式主義かテロルか、このいずれかしか存在しない。毛

(e) 長征の到達地であった延安は、毛沢東がここを拠点に抗日戦線を指揮したこともあり、革命の聖地とされる。

とその一派は第三の拠点を発明する必要に迫られるだろう。すなわち民衆の政治的動員に訴えかけることであり、これは多数派の代表者、とりわけ党および国家上級幹部を打破するためのものだった。この訴えかけは、造反と組織化が非統制的な仕方で行われてもよい、ということ前提とする。大いに躊躇った後、毛の一派はこの非統制的な闘争と組織化を、先ずは大学、次いで工場において認めるという決断を下す。ところが矛盾してもいることに、毛派は党—国家という一般的空間の中にまで、このような革命の組織化に関する様々な刷新を、導入しようとするのである。

われわれはここで仮説の核心に在る。文化大革命とは一つの矛盾の歴史的展開だからである。一方での問題は、プロレタリア独裁国家の周辺部に措かれた民衆の革命運動を再び活性化し、さらには、当時の理論的隠語を使って言えば、国家は形式上「プロレタリア」国家であるとはいえず、民衆蜂起の諸形態をも含めた階級闘争が継続される、と認めることである。社会主義（という仮面）の下でブルジョワジーが復活し、共産党、それ自体、只中で組織化しつつあるとすら、毛とその一派は口にするだろう。他方では、いわゆる内戦は除外されたままであり、党と国家の関係の一般形態、とりわけ抑圧の力に關しては、少なくとも党をほんとうに潰滅させるような

ことになってはならないという点で、何一つ変化させてはならない。「重い責を負った党幹部多数派はよい」と告げることで、毛はこのことを認識させようとしたのである。

この矛盾は、頻発する局所的造反によって党の権威から相繼いで逸脱してゆく暴力的なアナキー状態と同時に、大いなる野蛮の再取捨という避けがたい特徴を伴いつつ、武装した民衆の決定的な舞台への登場を導くことになる。

この相次ぐ氾濫が、文化大革命の年表（諸段階）を定める。当初、革命指導部は造反を、いくつかのまとまりを持った教訓といった枠組の内部に維持しようとする。この企ては、紅衛兵が都市のいたるところに拡張してゆく一九六六年八月に入るや、挫折する。この蜂起を甘ったれたガキどもの枠内に維持することが、次の問題となる。ところが一九六六年末、とりわけ翌年一月以降、学生ならぬ労働者が運動の主要な担い手と化する。そこで党および国家の管理からこの運動を遠ざけておこうとする手立てが探られることになるのだが、「権力掌握」運動の煽りを受け、一九六七年一月以降国家運営は大混乱に陥り、ついには、あらゆる犠牲を払おうとも、国家の軍隊を待機させ、最後の手段（運動への軍事的介入）を準備しようとする。一九六七年八月、武漢と広東で記

録された暴力の猛威を前にして、この措置もほぼ不可能と化すだろう。そもそも一九六七年九月以降の、鎮圧へと緩やかに反転する動きが始まったのは、軍事力の割拠という現実的危機の観点からである。

上述の事態について、こう述べておく。異論の余地なき革命への示唆を事態の推移に与えてきた政治的発明の数々は、この革命の立役者（若者たちとその数えきれぬ班、造反労働者たち、等々）からすれば当然と考えられていた指導者たち、すなわち毛と彼を支持する少数派がそれらの発明に割りあてた目標という視点からすれば、逸脱として展開せざるをえなかった。同時にこれらの発明は、つねに局所化された特異なものであり、現実には戦略的で応用の利く命題とはなりえなかった。要するに、これらの発明は、戦略上の重要性（または普遍的射程）という点では消極的なものだった。というのもそれらが保持していたのは、そしてまた世界中の活動家の精神を生き生きと脈打たせていたのは、革命的政治活動の中心的生産点としての党―国家の終焉以外ではなかったからである。より一般的に言えば、文化大革命が示したのは、もはや諸階級を代行する厳密な論理に即して、革命的民衆に諸々の政治活動や組織化を割りふることはできないということだった。だからこそ文化大革命は、全く以て第一級の重要性を帯びた、一つの事件（イベント）であり続

けている。

実験の場

上記の仮説を、以下に掲げる、少なくとも時系列順に採用された、七つの準拠枠の上で、わたくしは実験―検証してみたい。

一、おそらくその大部分を毛が起草したであろう、ともあれ最も革新的な、党―国家の官僚的形式主義から最も断絶した核心的文書である、一九六六年八月に提出された十六箇条の通知¹⁾。

二、紅衛兵と中国社（一九六六年八月から、少なくとも翌年八月にかけての時期）。高校生および、その情況がどのようなものであったにせよ、多かれ少なかれおのれ（の若さ）に身を任せた大学生の政治能力の限界のたしかな探求。

三、「革命的労働者の造反」および上海人民公社（一九六七年一月から二月にかけて）という圧倒的に重要な前代未聞の事件。というのもそれは党中心主義に取って代わる権力形式の一つを提示しているからである。

四、「権力の掌握」、すなわち一九六七年一月から翌年春にかけての「大連合」、「三結合」そして「革命委員会」。ここでの問題は、運動はほんとうに新たな組織を創造で

(f) 中共第8期中央委員会第11回全体会議で発表された「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」(16箇条)。「文化大革命」を定義している。

きるのか、それとも党の再建を狙ったものにすぎないのかどうかを知ることである。

五、武漢事件（一九六七年七月）。ここが運動の頂点であり、軍は分裂の危機に曝され、極左は優位に事を進めるが、まさしくそれゆえに敗北するだろう。

六、労働者たちの大学への進駐（一九六八年七月末）。この事件を以て、事実上、独立学生組織の存在は終わる。

七、毛沢東個人への崇拜。この指標は西側ではたいへんな侮蔑の対象となったため、この現象にいかなる意味があったのか、とりわけ、党の保守的な連中ではなく、造反学生および労働者にとつての旗頭として、このいわゆる「崇拜」が奉仕した文化大革命において、この現象はいかなる意味作用をもったのかを問うことは、蔑ろにされた。

十六箇条の決定

同文書は一九六六年八月八日、党中央委員会代表大会で採択された。そこではある種の天才的な冴えとともに、「文化大革命」と呼ばれる企ての根本的矛盾が演出されている。この演出の徴の一つは、少なくともこの文書には、「プロレタリア文化大革命は、人びとの魂にふれる大革命である」という謎めいて形而上学的な最初の文言を除けば、進行中の政治的継起の（「文化的な」名

前についての説明がない、または殆どないことである。この観点からすると、「文化的」はある特殊に根源的な意味で「イデオロギー的」に等しい。

この文書全体の傾向は、革命の正統性をめぐる偉大な伝統における、自由な造反への純粹かつ単純な呼びかけである。大いにありうることだが、これはおそらく非法文書である。というのも中央委員会の構成を、軍（または林彪を支持する部隊）を後ろ盾に、毛派が「修正」したからである。学生革命活動家が現われて、保守官僚の大会への出席を禁じたのだ。事実、これはきわめて重要な点だが、この決定により、長期に及ぶ中央委員ならびに党書記不在の時期が始まる。以降、（党の方針を下す）核心的主要文書は、四つの機関により、共同で署名されることになる。四つの機関とは、先ずは中央委員だが、これはもはや幻影にすぎない。「中央文化革命小組」、これはきわめて制限された、その場限りの、「とは言え本来の意味での実質的政治権力を、造反が承認しているという理由で恣にする集団であり、次に周恩来が総理を務めた國務院、そして最後に、林彪によって再編された、公務統行的際には最低限この機関の許可を得なければならぬという、恐怖の党中央軍事委員会である。

通知のいくつかの文言にはある特殊な辛辣さが含まれ

ており、これは革命への直接要求という点でも、党に新たな組織形態を対峙させる必然(要)という点でも、同様である。

民衆動員に関しては、とりわけ、「敢然」ということをなによりも念頭におき、おもうぞんぶん大衆を立ちあげさせること」および「運動のなかで大衆に自分で自分を教育させること」を題辞に掲げた、第三箇条と第四箇条が引用されるだろう。例えば――

各級の党委員会にたいする党中央の要求は、ほかでもなく、正しい指導を堅持し、「敢然」ということをなによりも念頭におき、おもうぞんぶん大衆を立ちあげさせ、軟弱で無力な状態をあらためること、誤りをおかしはしたが改めたいとおもっている同志が重荷をおろして、戦闘に参加するようはげますこと、資本主義の道をあゆむ実権派を更迭し、その指導権をプロレタリア革命派の手中に奪いかえすということである(第三箇条)。

或いはまた――

大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆の創意を尊重しなればならない。「恐ろしい」という気持ちをと

嗚呼、左翼

のぞかなければならない。騒ぎがおこるのを恐れてはならない。毛主席がつねづねわれわれに教えているように、革命はそんなにお上品で、そんなにみやびやかな、そんなにおだやかでおとなしく、うやうやしく、つましくひかえ目のものではない。大衆がこの大革命運動のなかで、自分で自分を教育し、なにかが正しくて、なにかがまちがっているか、どのやり方が正しくて、どのやり方が正しくないかを見わけるようにしななければならない(第四箇条)。

そして最後に――

大字報や大討論の形式を十分に運用して、大いに意見を述べさせ、それによって、大衆が正しい観点をあきらかにし、誤った意見を批判し、すべての妖怪変化を暴露するようにならなければならない。この

- (6) 1967年9月の時点で毛派小組は12名を数えた。毛、林彪、陳伯達、江青、姚文元、周恩来、康生、張春橋、王力、閔鋒、Lin Jie [不詳]、戚本禹である[康生、江青、張春橋、王力、閔鋒、戚本禹、呉冷西、尹達、穆欣、陳亜丁の10名からなり、毛、林、周は当初から入っておらず、またLin Jieは特定できていないが、パディウが典拠とした資料は不明である]。中央委員内右寄りの老獪にして大胆なユーモアの持ち主であった陳毅は、「おや、これが巨大なる中国共産党だと? 12人で?」と語ったという。だがフランス革命時、1792年から94年にかけて、公安委員会幹部集団はさらに制限された人数から成っていたことに注意されたい。革命は、しばしばきわめて制限された政治方針を、民衆が引き起こす巨大な現象と結合させる。
- (g) 以下、「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」からの引用は、前掲、『中国プロレタリア文化大革命資料集成』、第1巻、所収の「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定 1966年8月8日採択」、より。強調全て引用者。

よ、う、に、し、て、こ、そ、 広、範、な、大、衆、は、闘、争、の、な、か、で、自、覚、を、高、め、才、能、を、の、ぼ、し、是、非、を、み、き、わ、め、敵、味、方、を、は、つ、き、り、区、別、す、る、こ、と、が、で、き、る、の、で、あ、る、(第、四、箇、条)。

第七箇条のある部分は格別に重要であり、実践的にも膨大な帰結を持つだろう。以下である。

運、動、の、な、か、で、は、(…)、大、学、専、門、学、校、中、学、校、小、学、校、の、学、生、生、徒、の、あ、い、だ、に、存、在、す、る、問、題、は、い、つ、さ、い、と、り、あ、げ、な、い、こ、と、に、す、る。

中国全土が、少なくともここに開かれた時期にあつては、各都市で革命を目指す若者が処罰を受けないと保証されていることを、理解する。これは明らかに革命運動が全国に拡張し、いずれにせよ一九六七年九月までは、革命精神を全国が保持するのを認めるということである。

組織化形態については、「文化革命班、文化革命委員会、文化革命代表大会」と題された第九箇条が、運動における、また運動による、党に外在的な多数多様な政治的再結成の発明に、保証手形を与えている。「プロレタリア文化大革命の運動のなかで、多くの新しい事物が、つぎつぎとあらわれはじめている。多くの学校、多くの部

門、で、大、衆、が、新、し、く、つ、く、り、だ、し、た、文、化、革、命、班、文、化、革、命、委、員、会、な、ど、の、組、織、形、態、は、偉、大、な、歴、史、的、意、義、を、持、つ、新、し、い、事、物、で、あ、る。」

これら新たな組織化は、一時的なものと考えられてはならず、一九六六年八月、毛派は党による政治的独裁の破壊を標的に定めることを証している。「(…)、文化革命班、文化革命委員会、文化革命代表大会は、臨時的な組織であつてはならず、長期にわたる常設の大衆組織でなければならぬ」。

最後に、パリ・コミュニケーション、したがって党についてのレーニン主義的理論に先立つプロレタリアの二情況が引き合いに出されていることが示す通り、問題は明白に、党の権威ならぬ民衆の民主制に従った諸々の組織化である。「文化革命班と文化革命委員会の成員、文化革命代表大会の代表を選出するには、パリ・コミュニケーションのよ、う、に、全、面、的、な、選、挙、制、を、と、ら、な、け、れ、ば、な、ら、な、い。候、補、者、の、名、簿、は、革、命、的、な、大、衆、が、じ、ゆう、ぶ、ん、に、下、相、談、し、た、う、え、で、提、出、し、さ、ら、に、大、衆、が、く、り、か、え、し、討、論、し、た、の、ち、選、挙、を、お、こ、な、わ、な、け、れ、ば、な、ら、な、い。」

当選した文化革命班と文化革命委員会の成員、文化革命代表大会の代表にたいしては、大衆はいつでも批判をくわえることができる。もしその職にふさわしくないものがあれば、大衆が討論したうえで、改選あるいは、更

が根底から変形させることを標的に掲げるところの国家という抑圧装置を、粉碎しなければならぬ、と。第十五箇条が述べるところは、このような答えでは明らかに、ない。「部隊での文化革命運動と社会主義教育運動は、中央軍事委員会と総政治部の指示にしたがつておこなう」。またしてもここで、党という中心化された権威が舞い戻ってくるのである。

最後に、第十六箇条は、依然齟齬を来たしたままの指針の組合せから成っており、その好戦的態度への仄めかしをも含めて、党一国家との関係における運動の相継ぐ袋小路化を準備する。なるほど、民衆の運動から出立し、党の頂点を占める支配的流れが最近まで課してきたのとは異なる政治路線の定義が絶えず問われてはいる。しかし、二つの本質的問いが宙吊られたままである。すなわち、誰が敵を指し示し、誰が革命的批判の標的を定めるのか？そしてこの深刻な問題において、公共保全、自警団（私兵）、軍といったものに対して抑圧装置が果たす、疎かにできぬ役割とはどのようなものなのか？という二つの問いである。

紅衛兵と中国社会

八月の通知に引き続き、学校教育を受けた青年の組織する「紅衛兵」現象が、途方もない規模を獲得する。天

安門広場で巨大な集会が何度も開かれ、一九六六年末まで続けられたことは知られていよう。この集会に、毛は無言で数十万の青年男女の前に姿を現わす。だが最も重要なことは、無数の革命組織が軍の配備したトラックに乗り、「経験交流」という資格で列車などの輸送機関を無償で利用しつつ、各都市に、次いで全土に、波のごとくに押し寄せていったことである。

ここでわれわれが、運動を中国全域に拡散させてゆく一撃の力を目のあたりにしているのは間違いない。この運動には全く以て驚嘆すべき一つの自由の風が吹き荒れており、諸班は露天の下で（公明正大に）この運動に取り組み、新聞、ビラ、幟、際限なく続く壁に貼られた檄文など、あらゆる種類の暴露が、政治的闡明と同様、増殖してゆく。社交の場では情容赦ない諷刺画が惜しみなく描かれる（一九六七年八月、夜陰に乗じて壁に貼られた檄文による周恩来への糾弾は、いわゆる「過激派」潮流の失墜の一因となるだろう）。銅鑼と太鼓を持ち、情熱に燃えた声明を発する行列が、夜更けまで巡回する。

その一方で、武装傾向を持った班、突撃隊さながらの歯止めのかかぬ行動が出現したのは、あまりにもはやかった。「四旧打破」（搾取階級の旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を批判する闘争）、これが一般的標語である（これを「文化的」なる形容詞の内実である。中国では「文

化的」とは、「肯定的と言うよりは）むしろ「文明化作用に属する」の意、旧マルクス主義で使われた言葉では「上部構造に帰属する」の意）。多くの班がこの標語を、破壊、暴力、それどころか迫害の謂いであると解釈する。髪を三つ編みに結んだ「革命の気風に合わない」とされた長髪を指す）女性や知識人、文革に躊躇する学者、あれこれのセクトと同じ習慣的な言葉使いを行わない「幹部」を標的とした狩り、図書館や博物館・美術館からの略奪、革命家気どりの小班长たちによる、優柔不断な民衆に対する手に負えない傲慢。こうしたこと全てが、やがて、日常を生きる人びとの中に、紅衛兵たちの過激に走る翼に対する事実上の嫌悪を引き起こすだろう。

根本から言えば、党中央多数派に対する毛の反抗が公になされた最初の行為である一九六六年五月一六日付の通知状^(h)で、この問題はすでに露呈していた。「うち破らなければうち立てられない」と主張する必要を、この通知は明瞭に述べており、己の権力基盤を破壊する一切に対立するために「建設的」精神を褒めそやす保守派を、公然と非難する。だが、破壊の明白なわかりやすさと、建設という緩慢にして曲がりくねった特徴との間でバランスをとるのは、困難である。

「旧に対する新の闘争」を唯一の標語として武装した紅衛兵の多くは、革命行為にありがちな周知の（ネガ

ティブな）傾向に屈した、というのが真実だろう。すなわち偶像破壊、些細な理由で行われる人びとへの迫害、意識的に受け容れられた或る種の蛮行に屈したのである。それはまたおのれ（の若さ）に身を任せるという若者の傾向でもある。あらゆる政治組織は世代を横断するものでなければならず、若者が周囲から切り離された状態で政治的に組織化するの**は悪しきことである**。ここから引きだされる結論はこれである。

紅衛兵が革命精神に則った反知識人的急進主義^{ラディカルイズム}をまったく発明しなかったのは確かである。フランス大革命時、化学者ラヴォワジエに死刑宣告が下された際、訴追官フリーキエ・タンヴィルは、「共和制は知識人を必要としない」という注目すべき言葉を述べた。これはつまり、真の革命はみずからに必要なものを全て己自身で創造するのであり、だからこの造物主的絶対主義を遵守する必要があると共和制が推定したということである。この観点からすれば、文化大革命は真の革命であった。科学と技術をめぐる問いについての基礎的標語は、重要なものは「紅」たることであって「専」たることではない、というものだった。或いはより「節度ある」言い方をすれば、これが公式の標語となったわけだが、「紅であると同時に専」でなければならぬ、但し先ずは紅くあれ、となる。

(h) 文化大革命を公式に発動した、通称「5・16通知」。

だが、ある種の革命的突撃隊の蛮行を著しく悪化させたのは、そこには若輩の行為に見合うだけの政治的肯定性のための、新たなことを肯定的に創造するための、包括的政治空間がなかったということである。批判と破壊の任務には、発明の任務が国家を頂点として展開された仮借なき闘争によって停止させられていただけに、いつそう後者〔発明の任務〕には持ちえなかった自明性があった。

上海人民公社

一九六六年末と翌六七年始めは、文化大革命が猛威をふるった時期を代表する。工場労働者の大規模かつ決定的な、舞台への登場である。この力強い時期において案内人の役割をはたしたのが上海である。

公式には中国国家の「指導階級」であるものがこの舞台に登場したということの逆説を、よく見定めておく必要がある。この登場は、わたくしに言わせれば、右派によって為されたのである。実際、一九六六年一二月、紅衛兵たちの毛沢東主義運動に抗して労働者支持層——特に労働組合の活動家たち——を利用するのは地方官僚たち、党および市町村議会の保守潮流なのだ。これは、少なくともフランスにおける六八年五月およびそれに続く年月に、フランス共産党が労働総同盟（CGT）の年老

いた歩哨を、若年労働層と結ばれた学生革命家に抗して利用したのに、少しばかり似ている。変動する状況をうまく利用しつつ、上海の党および市町村議会のボスどもは、純粹に経済主義的なセクト化された要求の中に労働者を放り込み、工場や管理行政の中への若き革命家のあらゆる介入に抗して、労働者を、この流れを止める杭として立たせたのだ（六八年五月、フランス共産党が安売りに出された工場の前に杭を打って邪魔立てし、いたるところで「左翼」を狩ろうとしたのと全く同様に）。労働者を本体とする野蛮なやり口で行われたこれらの運動は大規模に広がってゆき、とりわけ混乱の拡大を狙いとする輸送機関や燃料関係企業のストによって、党のボスどもは秩序の救済者としてじぶんを演出することに成功する。これら一切を理由として、革命を目指す少数派は、官僚化されたストに対する介入を余儀なくされ、「経済主義」および「物質的刺戟」の要求に対して、共産主義的労働のための、またとりわけ、諸々の個別特殊な要求に対する一般普遍的な政治意識の優位を目指す、禁欲のキャンペーンを張らざるをえなくなる。これが、とりわけ林彪の掲げた「利己主義に反対して闘い、修正主義を批判せよ」という大標語の地平である（毛派にとつて「修正主義」が、共産主義諸党派および中国共産党幹部大多數の依拠するソ連邦に追隨した、革命のダイナミ

ズムを悉く放棄するという方針を指すことは知られていない（よう）。

当初、労働者における毛派勢力は、むしろ脆弱なものだった。一九六六年末頃には、その数は四千人であったと言われている。やがて毛派が紅衛兵と緊密に結びつき、少数派の活動家から構成されることになるのは確かである。それでも、いわゆる工場におけるその行動の自由は、工作機械工場のような、何年もの間、革命家によつて模範的に示される勝利を手にするだろういくつかの企業を除けば、さほどではなかった。思うに、これはまさしく労働者の直接行動が、毛派の活動家が都市権力の枠組で展開していた生き生きとした抵抗（そこには官僚主義が大いに移植されていた）と、工場において激突したからである。このため、長らく毛に帰依していた官僚の一部、および軍内一部の援助を受けて、毛派の活動家は党地方委員および市町村議会を廃位するだろう。「権力掌握」と呼ばれる事態がここに出来し、「上海人民公社」の名の下、文化大革命は一つの転回点を迎えることになる。

この「権力掌握」はただちに逆説的である。一方でこの掌握は――すでに十六箇条の通知が示す通り――、絶対的に党一国家に反するモデルである。パリ・コミューンを構成していたのは、互いに齟齬を来たす諸組織の団

嗚呼、左翼

結であり、そのアナキー的性質の実効性のなさを、すでにマルクスは批判していた。他方でこのモデルは、国の水準において党が容認されうる唯一の形象に留まっている限り、たとえ党の伝統的機関の多くが危機に晒されていようとも、「上海以外の」国土へと展開してゆくことはありえない。革命の騒乱に満ちた事件が続く間じゅう、周恩来は国家の統一性の保証人であり続け、行政を担う最低限の管理をし続けているのだ。ご存知かと思うが、毛の最も近くで政治を切り回すことを強いられた周恩来を毛が否認したことは決してなかったものであり、この「最も近く」には最も右寄りの者も含まれていた（一九七〇年代中盤に現われた革命の慣用語法を用いれば、周恩来こそが、「党内にありながら資本主義の道に加担した上層部責任者たちのうちでも第二位の地位にある」と形容された鄧小平を復活させるのである）。ところで周恩来は、全国で為される「経験交流」は合法である、但し、全国に拡がってゆく革命組織はありえないと、紅衛兵に明言していた。

と同時に、地方を基盤とする学生と労働者の間で始まり、はてしない討議の末に制定された上海人民公社は脆弱な統一性しか持ちえない。ここでもまた、挙措（革命家たちによる「権力掌握」が原理的であるとすれば、その政治空間の方はあまりに狭隘である。その結

果、労働者の舞台への登場は、革命的民衆という基盤の
見世物的な拡張であり、官僚化された権力形態を大規模
に、ときに暴力的に試練に晒すことであつたと同時に、
人民主導政治と国家権力との間の新たな腑分けをめぐ
る、明日なき素描でもあつた。

権力の掌握

一九六七年初めの数ヶ月間、革命家が反毛派の市町村
議会を転倒させた上海で起きた一連の出来事を経験に鍛
えられて、「権力掌握」は各地で増殖するだろう。この
運動の素材には或る注目すべき一面がある。諸々の小組
や突撃隊として組織された革命家、本質的には学生や
労働者が、市町村議会や党のそれをも含めた、あらゆる
種類の行政上の建物を襲撃し、暴力や破壊なしにはな
く、総体として酒^{デ・オニオン}、神的混乱の中で、ある新たな「権
力」をそこに打ち立てる。しばしば旧来のいわゆる権力
保持者を「人民の晒し者にする」さまが見られたが、こ
れはいかなる安寧の儀式でもなかつた。これは推測だ
が、官僚は「お仕置き帽」を被せられ、おのれの犯した
大罪を書きつけた掲示板を手に持たされ、頭^{シラベ}を垂れ、足
蹴にされるのを従容として受け容れたか、あるいはさら
に酷いことをされたにちがいない。とは言えこうした悪
魔祓いの儀式が革命実践の一つであることはよく知

られている。問題は、そこに集まつた日常を生きる人
びとに、かつては非難されることさえなかつた者たち、
沈黙のうちにその傲慢を受け容れられていた者たちが、
翻つて、公然たる侮蔑に身を晒すのだと知らせること
である。一九四九年の勝利〔中華人民共和国の建国〕以降、
中国共産主義者たちは、かつての地主、「各地の暴君や
悪しき小領主」を道徳的に退位させるために、この手の
儀礼を農村のいたるところで組織してきた。そうするこ
とで、何千年もの間なきに等しいと見做されてきた、最
も貧しい層である農民に、世界は「根底から変わった」
のであり、これからは農民がこの国の真の主人である、
と告げたのである。

だが、同年二月以降、地方各省の新たな権力を指し示
す「人民公社」という言葉が消え、代わりに「革命委員
会」なる表現が用いられるようになったことに注意され
たい。これは些細な変化ではない。「委員会」とはつね
に、党の省または市町村機関の名前だつたからである。
かくしてどの省でも「革命委員会」による膨大な配置
変えが起こるだろう。それがかつて懼^{おそ}れられた「党委員
会」の亡霊なのか、はたまた純然たる置き換えなのかは
明らかとされずに。

実際、指示の曖昧さは、委員会を政治的紛争の不純な
産物として指し示す。地方の革命家からすれば、問題

は旧来の官僚幹部をほぼ完全に一掃し、党とは異なる政治権力を代置することである。おのれの保身に汲々としている保守派にとっては、問題は、偽りの批判が済んだ後、再び各地の省官僚制を立て直すことである。保守派は中央が繰り返した、党幹部の大多数は善良であるという内容の宣言に励まされ、偽りの批判の道を選んだのである。一二名から成る「中央文化革命小組」というきわめて狭隘な派に集まった、毛沢東路線を国全体に拡げようとする者たちからすれば、問題は、革命組織のための標的を定め（権力の掌握）、彼らの目には党だけが唯一それであり続けている権力行使の一般的枠組を完全に保存しつつ、敵対者たちに恒久的恐怖を煽り立てることである。

主張される諸々の決まり文句は、次第に統一性を特権視するようになるだろう。「三結合」なるものが人びとの口の上ることになるだろう。その意味は、諸委員会を通して、三分の一を新たに到来した革命家、三分の一を事後的に自己批判した旧幹部、三分の一を軍部が統一することである。また「大連合」なるものについても語られるだろう。その意味は、地域によっては、革命組織は統一されるのが望ましく、また（ときに武装した）それらの間の紛争を失くすことが望ましいということである。実際のところ、この統一性は、討議の内容や、しか

じかの主導または確信の下に為される自由な組織化の権利に対してますます厳しくなる制限をも含めた、増大する強制権を前提とする。だが、事態が内戦に向かうがままに放置し、したがって抑圧装置において起こること〔強権発動〕に身を任せる他に、やりようがあるだろうか？ 一九六七年、あらゆる視点から見れば決定的なこの年のほぼ全てを費やす論争が、沸き起こるだろう。

武漢事件

一九六七年夏のこの事件はきわめて興味深い。それは一つの革命情況がその絶頂の瞬間に孕む全ての矛盾を示しているからである。言うまでもなく、革命^{レヴォリュション}の退行^{レツォリユション}が告げられる瞬間である。

一九六七年七月、軍内部保守派の助けを借りて、官僚の反革命勢力が、五十万を下らぬ数の労働者を抱える広大な産業都市、武漢を支配する。実質的権力を握ったのが陳再道司令官だった。ここで二つの労働組織が再び対立するのは確かであり、この紛争は、同年五月と六月、十数人の死者を出す。実質的に軍に統括された一方の組織は、地方官僚および旧来の労働組合主義者と結びついており、「百万雄師」と呼ばれる。他方の組織は「工人総部」と呼ばれ、毛派の流れを汲む、きわめて少数派の勢力（いわゆる「造反派」）である。

都市における反動勢力の支配を憂慮していた中央執行部は、公安部長、および当時「中央文化革命小組」メンバーの一人としてよく知られていた王力と呼ばれる人物を、現地に派遣する。王力は紅衛兵のたいへんな人気があった。彼は「極左的」な大袈裟な言辞を弄する傾向で知られていたからである。軍隊を純化する必要があると、彼はすでに主張していた。派遣された調停者一行は、「運動の中からプロレタリア左派を見つけだし、これを支持することにかけては他の追隨を許さず」という幹部一般、とりわけ軍幹部に対する指導方針に合わせ、造反派たる「工人総部」を擁護する旨を申し渡した周恩来の指令を携えてゆく。ついでに言っておくと、敵対し合う革命組織の間に割って入り、二つの急進派を調停するというきわめて重圧のかかる任務を周恩来は引き受けたわけで、そのため彼の許には日夜、省からの代表使節が訪れる。したがって彼は、「大同団結」の前進、諸「革命委員会」の統一化、そしてますます混乱を深めて暴力化してゆく具体的諸情況の中から、だれが「プロレタリア左派」なのかを見きわめるという作業に関して、たいへんな責任を負わされたのである。

到着した日、中央から派遣された使節一行は、同市のある競技場で、造反派組織との大規模な会合を持つ。革命の熱気はここで頂点に達する。

然るべく布かれた大革命の活動的局面に現れる全ての立役者（行為者）を、われわれは見る事ができる。先ずは農村（省郊外から来た民兵は、一九六八年の転回以降、紅衛兵や反攻者の抑圧に参加するだろう）の、しかもまた労働者の、そしてもちろん行政における、保守官僚の動員能力は莫迦にできない。しばしば少数派であるとは言え、行動力と勇気を以て、優位に立とうとする中央毛派の支持を受けた学生と労働者の造反組織、どの勢力を支持するか岐路に立たされた軍、おのれの政治を情況の変化にすり合わせようとする中央権力。揃った役者は以上である。

いくつかの都市では、これらの役者すべてを結びつける情況は、きわめて暴力的なものとなる。特に広東では、敵対し合う組織が武装した突撃隊と化してぶつかることは茶飯事だった。場所によっては、手を引こうと軍は決意する。十六箇条の通知において、運動の真つ只中で起こる諸問題には介入するなど言われていたのを口実に、省の軍幹部は、街路で為される戦闘を前にして、「革命上の乱闘に関する調査」に署名せよとのみ、当事者に要求したのである。禁じられているのは増援を呼ぶことだけである。その結果、広東でも、一夏の間、日々数十名の死者が出ることになる。

このような文脈の中、武漢では事態がさらに拗れてゆ

く。七月二〇日朝、「百万雄師」の突撃隊は、軍の部隊の支持を受けて戦略上の要点を占拠し、武漢全域から造反者を狩り出そうとする。中央が派遣した一行の滞在する館が襲撃され、軍の一派が王力および紅衛兵数名を誘拐し、容赦なく暴力を振るう。今度は「極左」の者たちが、首に「修正主義者」という弾劾の言葉が書かれた掲示板を掛けて——この情況の何たる皮肉！——、いたるところに修正主義者を目の当たりにしながら、「人民の晒し者にされた」わけである。公安部長は部屋に監禁された。造反傾向の震源地である大学と製鋼所は、屈強な者どもを擁する武装一派に攻め落とされた。ところがこの知らせが流れたとき、軍の別の部隊は、保守派およびその長たる陳再道の敵方に回る。「工人総部」派は造反の狼煙をあげる。革命委員は拘留状態にある。闘士数名が王力を解放し、空地や灌木をぬって王力は逃げ延び、武漢を脱出する。

これは明らかに内戦の徴候である。事態の流れを変えらるには、中央権力の冷血と、全省における軍部隊の、断固とした宣戦布告が必要となる。

未来のために、この事件から引き出される教訓は何か？当初、顔を腫らした王力は、北京で英雄として迎えらる。毛の妻にして稀代の造反幹部であった江青は、王力を熱烈に抱擁して祝意を表明する。七月二五

日、百万の人びとが、林彪の眼前で、彼を拍手で歓迎する。追い風に乗ったと考えた極左は、軍の根源的な純化を要求する。これはまた、八月に周恩来を右派として弾劾する檄文が現われたきっかけでもあった。

だがこれら全ては一瞬の外見にすぎない。武漢で造反派の支持が定められ、陳再道が更迭されたのは確かである。但し、二ヶ月後、中央文化革命小組から暴力的に除名されるのは王力であり、肝心の軍の純化は為されず、周恩来の重要性が増したにすぎず、秩序再建が紅衛兵および造反派組織の一部に対して行使され始めるだろう。これで明らかとなったのは、中国の党—国家の支柱である限りでの、人民解放軍の決定的役割である。人民解放軍は革命における沈静化の役目を仰せつかったのであり、造反左派支持を要求されはしても、しかし軍が分割され、かくして大規模な内戦の展望を開くなどということとは、予想もされず、認められもなかったのだ。そこまで進むことを望む者は少しづつ、「しかし」全員、排除されることになるだろう。また彼らと手を結んだことにより、江青その人に対しても、毛支持派と思われる者に対して、ある「軍の純化を目論んでいるのではないかという」執拗な嫌疑がつきまとうだろう。

これはつまり、文化大革命がこの段階に達した時点で毛は、造反派の隊列、とりわけ労働者のそれにおいては

統一が優位に立つことを望むようになり、そして紅衛兵の急進的精神と傲慢が齎す荒廃に、懸念をもちはじめたということである。一九六七年九月、地方巡視を行った後、毛は「労働者階級の内部では、どうしても分裂しなければならぬという理由はない」という方針を打ち出す。これが意味するところは、第一に、造反組織と保守派の間には暴力的な揉め事が絶えないということ、第二に、これらの揉め事を強制的に絶やす必要がある、組織は武装解除し、抑圧装置が暴力の合法的独占を再び獲得することで、おのれの政治的安定性を再び見出すことである、読む術を弁えている者は、理解するだろう。七月以来、闘争と造反というおのれの習慣化された精神をはつきりと示していたはずなのに（この頃にも未だ毛は、明らかに嬉々としながら、「各地はたいへん混乱している。こちらでも乱れ、あちらも乱れ、なんだか武闘をするのが大変よいような状態になっている。しかし、矛盾がこのことによつて、全面的に暴露されたので解決がしやすくなった」と述べている）、急進諸派の戦争に戦慄した毛は、「革命委員会の成立したところでは、小ブルジョア階級の革命派に対する指導を強化しなければならぬ」と宣言し、「実際には右派である」と見做して左派を弾劾し、またとりわけ、一月の上海における権力掌握以降、「インテリゲンチヤ、青年・学生の間」に氾濫

していた小ブルジョア階級・ブルジョア階級の思想が、この形勢を破壊した」と、いらだちを表明するのである。

労働者たちの大学進駐

一九六八年二月に入るとすぐ、保守派は一九六七年夏の終わりに起きた運動の退行以来の巻き返し之机が熟したと考えるようになる。だが毛とその一派は、依然として慄いている。彼らは「二月の逆流」を弾劾するキャンペーンを張り、革命諸派ならびに権力組織再建への支持を更新する。

だが、対抗し合う諸セクトによつて維持されていた大学の治安は、秩序への回帰という一般的な論理および革命の総括を担当する党代表大会の展望の中では、もはや支えきれなくなる（事実この大会は一九六九年初頭に開かれ、林彪および軍部の権力を承認することになるだろう）。北京大学構内に集結した最後の紅衛兵たちの純然たる潰滅だけは何としても避けつつ、見せしめを挙げざるをえなくなる。採られた解決策は全く常軌を逸していた。組織された労働者数千人に、軍隊なしで大学を包囲し、諸セクトを武装解除させ、しかも彼らの権威をじかに保証するよう、呼びかけたのである。後に幹部一派が言うように、「労働者階級がすべてを指導しなければならぬ」と、また「労働者は長期にわたつて学校にとどま

り、いつまでも学校を指導していかなければならない⁽¹⁾。文革期全体の中でも、これは最も驚くべき事件の一つである。この事件が、青年たちのアナキックにして暴力的な力に対して、この力の上位に、たんにすでに承認済の幹部たちの制度上の権威だけではなく、「民衆の」権威を、それも原則的にできさなく、承認する必然（要）性を、明らかにしているからである。何人かの学生が労働者に向けて発砲し、死者を出したのを受けて、毛および中央文革小組の全員が、最も知られた学生運動指導者たち、特に北京大学内の紅衛兵に崇拜されて国中に知られてもいた蒯大富が名高いが、彼らに出勤要請を行っていただけに、これはいつそう驚くべき、また劇的な瞬間でもある。強情な若き革命家たちと老いた衛兵との間で真つ向から為されたこの対談の、再筆記された資料が残されている⁽²⁾。この資料に抛れば、毛は青年たちの急進的精神が彼に引き起こした深い失望を、彼らに対する政治的友情の余韻を湛えながら、事態を收拾しようとする意志とともに、表明している。労働者を差し向けることによって、情況全体が「軍事介入」に転ずるのを毛が避けようとしていたことがよく分かる。第一の盟友であった者たちを、熱狂と政治的刷新の支持者であった者たちを守護しようと、毛は望んでいた。だが毛は党一国家の間でもある。たとえ暴力を伴おうとも、彼が望むのは

みずからの革新であつて、破壊ではない。結局のところ、「極左」的な若き暴徒の最後の一角を服従させつつ、承認を受けた幹部が下した文化大革命の（一九六八年の）方針、すなわち党の再興という方針と一致しないものに残された究極の余白を清算する術を、彼はよく弁えている。彼はそのことを知りつつ、甘受する。なぜなら彼には——そして誰にも——国家の存在をめぐる別の仮説がないからであり、また、熱狂的な、しかし苛酷でもあつた二年間の後に、国家が存在することを、そしてきわめて火急にその存在を民衆に知らしめることを、民衆の大部分が望んでいるからである。

個人崇拜

- (7) この対談の報告は、文化大革命全体に関する、現在、最も有能にして公明正大な分析者であると請合えるアレックスサンドロ・ルッソにより、長大な注釈付で（イタリア語に）翻訳されている。例えば、"The conclusion scene. Mao and the Red Guards in July 1968", in *Positions*, 13:3, 2005. を参照。〔日本語訳なし〕
- (i) 『人民日報』1967年9月14日、「革命的大批判の高まりのなかで革命の大連合を実現させよう」に引かれた毛の言葉と思われる。だとすれば、この文言は、精確には、新島淳良編、『毛沢東最高指示 プロレタリア文化大革命期の発言』、三一書房、188頁、によれば、「労働者階級の内部では、根本的な利害の衝突はありえない。プロレタリア独裁のもとにある労働者階級の内部では、なおさら、両立しない二大派の組織にどうしても分裂しなければならないという理由はない」となる。
- (j) 前掲、『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第1巻、179ページ。傍点引用者。1967年9月の「偉大な戦略配置」における毛の言葉。
- (k) 同前、180ページ。傍点引用者。「偉大な戦略配置」より。
- (l) 同前、178ページ。傍点引用者。「偉大な戦略配置」より。
- (m) 同前、206ページ。傍点引用者。1968年8月25日の毛の発言。
- (n) 同前、207ページ。傍点引用者。『人民日報』1968年8月25日、『紅旗』1968年2期での毛の言葉。

文革新期、毛への崇拜が、文字通り常軌を逸した形態で現われたことは知られている。巨大な彫像、毛沢東語録、絶えることなく捧げられる祈り、「偉大な舵手」に捧げられる賛歌だけではなく、とりわけ、あたかも毛の書いたこと・言ったことが、トマトを育てたり、交響曲の演奏会におけるピアノの使用法（または非使用）を決めることが問題となったりするような場合も含め、あらゆる情勢において十全であるかのごとき、参照される一意性ユニークネスの前代未聞の拡張があった。官僚秩序から最も断絶した、最も暴力的な造反者たちこそが、事物のこのような相を最も遠くまで推し進めたのを見ると、目を瞠る思いがする。とりわけ彼らこそが、「毛沢東思想の絶対的權威」という定式を放ったのであり、この思想を理解していない場合ですら、それに従わねばならないと宣言したのである。これらは端的に曖昧主義の言表であると、認めざるをえない。

こう付け加えなければならぬ。格闘する全セクトおよび全組織が毛沢東思想を援用していることから理解される通り、完全に矛盾し合う複数の指針を指し示しうる表現は、その注釈が絶えず変化する諸々の引用のあふれんばかりの慣用の外では、ついにはあらゆる意味作用を喪失する、と。

それでもなおいくつかの注釈を、通りすがりにわたく

しは行いたい。一方で、この手の献身的行為〔毛の文書の過剰な参照〕は、われわれのそれをも含めた既成宗教の中でその解釈をめぐる抗争と同様、全くありふれたことであり、そこに認められるのは一つの病理ではなく、正反対に、ここでは偉大なる一神教諸宗派が、聖なる牡牛であり続けているということである。ところで毛がみずからの人民に対して無限の奉仕以上の何かを行ったことは、確かである。彼は「西欧」列強に詔へびう植民者たる日本軍の侵略から人民を解放したと同時に、農村における封建主義、すなわち前資本制的掠奪からも解放したのであって、いわゆる一神教諸宗派の近年の歴史において、虚構の英雄であれキリスト者であれ、このようなことを成し遂げた人物は、われわれの国にはいなかった。他方で、偉大な芸術家たちに対する、その伝記をも含めた神聖視は、われわれの「文化的」実践において繰り返される与件である。われわれは詩人が遺した洗濯屋伝票を珍重しているのではないか。もし政治が、わたくしの信ずる通り、そして実のところ詩もまた同様であると信ずるのだが、真理の一つの手続きであるとすれば、そのとき、芸術における創造者の神聖視も、政治における創造者の神聖視も、莫迦モカげたこと以上でも以下でもない。よく考えてみれば、おそらく、莫迦以下ではない。というのも政治的創造とは蓋然的に言ってより稀なるもの

であり、確実により危険なことであり、そして万人に、とりわけ一般には権力によって存在しないと見做される者たち——一九四九年以前の中国農民および労働者のような——に、直接に宛てられるからである。

だからと言って、共産主義諸国家および党の変わることなき与件にして、文化大革命における最悪の与件である政治的崇拜の個別的現象の解明を、われわれが免除されているわけではない。

一般的視点からすれば、「個人崇拜」は一つの主張に結びついており、これに抛れば、労働者階級を代行する党は、政治におけるヘゲモニーの源泉であり、正しい路線を必然的に保持する。一九三〇年代以降に言われたように、「党は、つねに正しい」。問題はこのような代行を保証するものも、正しさに関するこのような誇張された確信を保証するものも、何もないということである。したがって重要なのは、このような保証の代替物として、まさしくその唯一の特異性によって正当化された一つの特異性である代行の代行があるということである。つまるところ、一つの人格、一つの特異な身体が、天才という美学的な古典的形態において、至高の保証の代行を務めることになる。そもそも奇妙なことは、芸術の領界において天才の理論に規律訓練を受けたわれわれが、政治の領界においてこの理論が出現するときには、その理論に

きわめて不快な感情を抱くことである。共産主義諸党派にとって、一九二〇年代から一九六〇年代までの間、天才的個人とは、一に懸かって党を代行するという、胡散臭くも危険な力を体现する固定点のことだった。というのも、その公正と〔運動の現場から〕遠く離れた孤独な一人の人間の知力を信ずることは、省の小物幹部ばかりが目に入ってくる一機関〔執行部〕の真理と純粋を信ずるよりも、容易だったからである。

中国では、この問題はさらに複雑となる。というのも、文革期の間、毛は、党を代行する力よりはむしろ、党そのものの中に脅威となる「修正主義」を見きわめ、これと闘う者を体现していたからである。毛は、ブルジョワジーは共産党の中では政治的に言って能動的な存在であると告げる者、或いは毛の名においてこの言葉が言われるに任せる者である。毛はまた、党総書記として褒めそやされるまさしくその瞬間に、造反者を大いに鼓舞し、「造反有理」の標語を広め、諸々の採め事を奨励する者でもあった。この〔両義的な〕資格を以って、ときに毛は、革命家集団に対して、現実の党の保証人であるよりはむしろ、依然として来るべきプロレタリア政党的、唯一無二の体现

(8) ここに挙げた例は現実のものであり、『北京週報』に載ったさまざまな記事がフランス語に訳された。毛派弁証法がいかにトマトを栽培するか、はたまた中国の交響楽におけるピアノの使用における正しい路線をいかに見つけ出すかといったことが、そこで学ばれる。そもそもこれらの文書は、そこに文字どおりに示されている問題に関してではまさしくなく、あらゆる断片から従来とは異なる思考を創造する企てに関して、きわめて興味深く、それどころか説得力すら備えている。

者となる。代行に対する特異性の巻き返しとして、毛は存在するのである。

結局のところ、こう主張せざるをえない。「毛」とは革命政治の領野における、内在的に矛盾した一つの名前である、と。一方でそれは党一国家の至高の名前であり、党一国家の疑う余地なき総書記であり、戦闘的な長にして体制の創始者である限りで、共産党の歴史的正当性を所持する人物である。他方で「毛」は、国家官僚制には還元されない党の名前である。青年と労働者に向けて発された造反への呼びかけにおいて、それはまさしくこのような名前である。ところがこの名前は、党の正当性のまさしく内部において、この名前なのだ。事実、しばしば体制内における一時的な少数派の決断、ときに体制に反してさえいた諸々の決断を掻い潜ってこそ、毛は、一九二〇年から四〇年代までつづいた勝利（ソヴィエトの忠告に対する猜疑、「農村による都市の包圍」という既成蜂起モデルの放棄、人民（と）の絆の絶対的優位、等々）という、中国共産党のまったく特異な政治的経験の持続を、確かなものとしたのである。あらゆる点で、「毛」とは一つの逆説の名前である。権力への反逆者、「発展」の連続的必要（然）性に耐えうる弁証法家、自己止揚を求める党一国家の標章、権威への不服従を称讃する戦闘的な長……その「崇拜」に熱狂的態度を与

えたのは、まさしくこれである。なぜなら毛は主体的に、スターリン型国家の莊嚴さに与えられる同調と、事態の進展によって飽き足らなくなった旧来型の反攻に對抗し、現実の共産主義に向かって闊歩することを望む全ての若き革命家の熱狂とを、あわせもっていたからである。「毛」は、「社会主義の建設」を、しかしまたその破壊をも、任命（命名）したのである。

結局のところ、その袋小路そのものにおいて、文化大革命は、現実的に、そして包括的な仕方でも、政治が党一国家の枠組に閉じ込められたとき、この枠組から政治を解放することの不可能性を、証言している。この不可能性は、飽和のかけがえのない実験である。ここでは、新たな政治の道を探しだし、革命を再開し、社会主義の形式的諸条件の中で労働闘争の新たな形態を見いだすという暴力的な一つの意志は、国家秩序および内戦拒否に関わる様々な理由から、党一国家の一般的枠組が強い維持管理によって、暗礁に乗りあげたからである。

今日、全ての解放政治は、党または諸党派のモデルと訣別し、「党なき」政治として、とは言えアナーキズムの形象に陥ることなく、みずからの意志を明確にしななければならぬことを、われわれは知っている。アナーキズムの形象が空虚な批判以外のものであった^た験しはななく、さもなければ、黒旗が赤旗の分身ないし影にすぎな

いのと同様、共産主義諸党派の分身または影以外のものであった験しはないからである。だが、文化大革命に対するわれわれの負債は、膨大なまま残されている。というのも、党のモチーフのこの大胆にして雄壮なる飽和に結ばれた——今日、依然として諸階級ならびに階級闘争

文化大革命略年表

一、近前史（「百花」から「黒幕」へ）

(a) 「百花齊放」キャンペーン（一九五六年）。同キャンペーンは、一九五七年六月、後にしばしば「妖怪変化」と形容された、「右傾知識人」を弾劾するきわめて暴力的な告発と化した。一九五八年五月、「大躍進」政策、同年八月、「人民公社」政策が打ちだされる。一九五九年八月、集団化運動を批判した彭德懷（国防部長）が退位。代わって林彪がこれに就位。

(b) 一九六一年より、積極的経済介入政策による忌わしき収支報告の開始。中央委は目標の「再調整」を決定。毛沢東に代わり劉少奇が国家主席就任。一九六二年から六六年にかけて、中国では劉の著作が千五百万部を売り上げ、毛の六百万部を凌駕。吳晗（北京副市長）の歴史物京劇戯曲『海瑞罷官（罷免された海瑞）』（彭德懷の退位に対する間接的批判）発

のモチーフに繋がれた最後の革命として明瞭に現われている事態と同時代的である——われらが毛沢東主義は、或るきわめて重要な移行の経験であり、またその名であつたことになるだろうからである。そして、この移行に忠実でない者には、何も起こらないだろう。

売さる。一九六五年九月、さる幹部大会席上で、毛沢東は呉晗糾弾を要求するも許諾を得ず、上海に身を引く。

二、端緒（姚文元の記事から十六箇条の決定まで）

(a) 姚文元は毛の妻、江青と合作して吳晗に対するきわめて激しい弾劾記事を上海で発表。その標的は「黒幕」の長と見做されていた北京市長の彭真であつた。事態への対処として、一九六六年一月から二月にかけて、最初の「中央文化革命小組」が、逆説的にも彭真を組長として発足する。同集団（「五人小組」と称された）は批判を制限する傾向を持った「二月綱要」を布告するも、全く効果はなかつた。

(b) ところが上海では林彪と江青の庇護下にもう一つの集団が結成され、「部隊の文学・芸術活動についての座談会」を開催。同座談会の記録が中央軍事委員会（最重要機関）に送付される。党分裂は完了されたかに見える。

(c) 一九六六年五月、執行部の「拡大」総会。新たに改組された「中央文化革命小組」発足。彭真一派は「五・二六通知」の名で知られる、後続する全ての事態にとって根本的意味を

(9) 逆説としての毛については、次のきわめて美しい書物を読む必要がある。Henri Bauchau, *Essai sur la vie de Mao Zedong*, Paris, Flammarion, 1982. [日本語訳なし]

持つ文書の中で激しく糾弾される。「……党内、政府内、軍隊内および文化領域の各界にまぎれこんだブルジョア階級の代表者を批判（……）しなければならぬ」と同文書は述べる。五月二十五日以後、七名の北京大学生らが大字報（壁新聞）で学長を糾弾。学生動員の事実上の端緒となる。

(d)毛、北京を離れる。当局は運動鎮圧のため「工作組」を大字報に派遣。五月末から七月末にかけての「五〇日」と呼ばれる期間、「工作組」による野蛮な抑え込みが吹き荒れる。

(e)七月一八日、毛、北京再訪。工作隊の廃棄。八月一日から一二日にかけて、中央委員「拡大」総会。同総会は型通りには行われなかった。林彪が軍を用いて定例参加者を総会に入らず、学生革命家の出席を認めたためである。毛沢東路線が迅速に多数派を獲得したのは、このような状況があったことだった。毛は北京大学の大字報を公に支持し、八月九日には群衆の中に現われる。革命の政治憲章は「十六箇条の決定」にまとめられる。そこではとりわけ、「プロレタリア文化大革命では、大衆が自分で自分を解放するしかなく、なにからなにまで、一手に引き上げるようなやり方はすべて採用してはならない」と言われる。これは学生班の指導権を抑圧してはならないということである。

三、「紅衛兵」の席卷

(a)八月二〇日以降、教育機関および大学に端を発する「紅衛兵」活動班が、「旧来の思考、文化、慣習、衣服を根本から破壊する」ために、都市に拡張する。とりわけ、毛の口にあ

がった者も含め、一度でも「妖怪変化」と見做された知識人および大学人に対しては、きわめて苛酷な迫害が行われる。北京では紅衛兵の大規模な集会在、とりわけ「大いなる経験交流」のために無償の列車使用を紅衛兵に許可する権利が認められた直後から、くりかえし開かれる。ピラ、チラン、諷刺画、地方紙、等々による劉少奇と鄧小平への批判。

(b)一月に入り、生産現場への紅衛兵の介入に関わる最初の政治事件、相繼ぐ。反毛派は御用組合と一部の農兵を革命運動家に差し向け、革命諸党派は無数に分裂（「セクト主義」）。各地で暴力が頻発。

四、労働者の登場と「権力掌握」

(a)上海当局は労働者の掲げるあらゆる「経済主義」的要求を鼓舞し、くりかえし揉め事を引き起こす。とりわけ先鋭化したのは、臨時雇いの労働者―農民の賃金および賞与の問題である。一九六七年一月、紅衛兵の一団と、軍隊の一部に支えられて「工場委員会」を構成していた「革命的造反派」の労働者が、管理棟、情報伝達系統などを占拠して「権力掌握」。彼らは党委員を覆し、「上海人民公社」形成を決定。諸班の間のはてしない交渉。労働者班が支配的で、党および軍部旧幹部の出席は厳しく制限された。

(b)一九六七年二月以降、「権力掌握」が中国全土に広がる。国家と経済における大混乱。新たな権力機関の配置がアナキー的かつ移ろいやすいものとなった原因は、きわめてちぐはぐな政治化にあった。すなわち旧幹部全員を退位させて

「裁く」傾向、あるいは逆に、多かれ少なかれ偽りの「革命的」諸派を率いたこれらの幹部による工作である。

(c) かくして中央当局は、一方では中央文化革命小組、他方では周恩来が管理する國務院、最終的には林彪が握る国防省に集結。「三結合」と呼ばれる、新たな権力方式を決定。これは、三分の一を「革命的民衆」代表者、三分の一を己の力量を検討するか行いを改めた党幹部、三分の一を軍隊が担う権力形態である。「民衆の」革命諸組織は、予め、それらの間で統一していなければならない（「大連合」）。新たな機関の名前は「三結合革命委員会」とされ、その最初の省委員会が二月一三日に発足（貴州省）。

五、紛争、暴力、分裂の全面化

(a) 劉少奇批判が（未だ彼と名指されずに）公式報道において開始されるや否や、無秩序がいたるところで膨張する。毛派と保守派の対立から、軍も含めた無数の暴力が起こり、防衛軍と軍はときに毛派、ときに保守派と衝突し、また毛派内部での衝突もあつた。民衆組織はたえず、分裂した。革命の方針もまた、割れる。一つの傾向は、一刻も早く革命組織の統一を図り、旧幹部に代えて各地に委員会を設置するというものだった。この傾向は実質的に党の迅速な再建を望んでいる。この方向で最も活躍したのは、国家の基本機能の維持に真の責任を負っていた周恩来である。もう一つの傾向は、圧倒的多数の幹部を排除した行政全体の徹底純化を望む。この傾向を代表するよく知られた人物が、王力と戚本禹である。

(b) 七月の武漢事件は（湖北）省を、やがては国を、内戦の雰囲気浸らせる。軍は武漢市で伝統官僚および彼らと繋がった労働組織を公然と警護する。中央から派遣された王力は「造反」を支持しようとするも、監禁され、撲られる。外からの軍事力介入が必要となり、かくして軍の統一性が脅かされる。

(c) 周恩来に反対するビラの出現。八月の一ヶ月間全体を、アナキー的暴力が、とりわけ広東で、席卷する。各地の武器庫で武器が略奪された。日々、数十名におよぶ死者。北京でイギリス大使館が焼打ちされる。

六、秩序再建の端緒といわゆる革命の終焉

(a) 一九六七年九月、地方巡視を終えた後、毛は「再建」路線のための決断を下す。毛は全面的に周恩来を支持し、軍部の機能拡張を認める（急進派（の純化徹底の願い）は聞き届けられず、「軍事統制」が布かれる）。極左（王力）は機関中枢から締めだされる。しばしば軍の庇護の下、万人のための「毛沢東思想研究の実習」が組織される。その標語は、「分裂ではなく、左を擁護しよう」であり、毛の報告に含まれる「労働者階級の内部では、どうしても分裂しなければならぬ」という理由はない」という言表から発しているものだった。

(b) この改訂は多くの場所で、紅衛兵、そこどころか造反労働者に対してさえ、暴力的な抑圧として、また政治的巻き返しの機会として、実行された（これが「一九六八年二月

- (c) 引用は前掲、『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第1巻所収、「通知 中国共産党中央委員会 1966年5月16日」、99頁より。傍点引用者。
- (p) 引用は前掲、『中国プロレタリア文化大革命資料集成』第1巻所収、「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定 1966年8月8日採択」、102頁より。傍点引用者。

の逆流」である。同様に、一九六八年三月末、再び毛は、革命委員会を守護し揉め事や分派行動を懼れてはならないという呼びかけ行動に訴える。

(c)ところがここに最後の「民衆の」小競り合いが生じる。中央当局は、少なくとも北京においては、直接的軍事制圧だけは避けつつも、ときに血塗れと化したセクト間戦争に明け暮れていた造反学生の最後の砦と決着をつけることを、決定する。大学への労働者分遣隊の派遣である。文化大革命の中心班は、最も名高い学生「急進派」を迎え入れ、労働者たちの進駐に物理的に抵抗する。これは「難聴者の対話」である（最も名高い「造反」学生の翻大富が逮捕される）。

(d)「労働者階級がすべてを指導しなければならない」という標語は、紅衛兵および革命造反派の終焉を確固たるものとし、そして「闘争、批判、改正」の名の下、党再建のための段階が始まる。大規模な数の革命青年が農村に、或いは遠く僻地に、派遣される。

七、文革以後を示す指標

(a)一九六九年四月の第九回党大会で、林彪の指導の下、広範に軍によって構造化された（中央委員構成員の四五パーセント）権威秩序の復活が認められる。

(b)軍事が前面化したこの恐るべき抑圧期は、またしても党中

枢に暴力的紛争を引き起こす。一九七一年、林彪が排除される（おそらくは暗殺された）。

(c)毛が死ぬまでの長く複雑な時期を特徴づけるのは、鄧小平と旧幹部数名の間の絶えまない抗争である。一方は周恩来を後ろ盾として要職に就いていた者であり、他方は文化大革命の記憶を体現する「四人組」（姚文元、張春橋、江青、王洪文）である。

(d)一九七六年、毛の死の直後、四人は逮捕される。鄧は長期に渡る権力を握り、これは事実上、党一国家を維持しつつ、資本主義的政策を実施した時期にあたる（文化大革命期、鄧は「党内にありながら資本主義の道に加担した上層部責任者たち」のうちでも第二位の地位にある者」と呼ばれていた）。

Alain Badiou, "La dernière révolution?" in *L'hypothèse communiste: Circonstances*, 5.

© Nouvelles Éditions Lignes, 2009

著作権代理：(株)フランス著作権事務所

解題にかえて

ここで日本語に定着させた文書は、Alain Badiou, “La dernière révolution?” in *L'hypothèse communiste*; *Circonstances*, 5, Fécamp, Les nouvelles éditions lignes, 2009. (アラン・バディウ、「最後の革命?」、『共產主義の仮説』(第二部)である。原文イタリック部分には傍点を付した。) 内は訳者による補足。著者の註には算用数字、訳者の註にはアルファベット小文字で、それぞれ通し番号をふった。

アラン・バディウは、一九三七年モロッコ生まれの哲学者(数学に関する著作もある)・演出家・小説家、そしてマルクス主義活動家。一九七〇年、「フランス・マルクスレーニン主義共産主義者同盟(UCFML)」を設立し、一八五年まで活動。その後、シンプルに「政治組織[organisation politique]と名づけられたグループを組織し、二〇〇七年まで活動を展開。いずれにおいても、

毛沢東の理論と実践を独創的に読み解きながら——毛の名に言及していない場合でも——、認識を具体的実践において検証し、翻つては実践から認識を根本的に問いなおし、ふたたび状況を変革するための認識へと鍛えあげるといふ螺旋状の活動、毛沢東の語彙を用いれば「活学活用」を、行ってきた。

「政治組織」解散後から現在までの詳細な動向を訳者は知らないが、現フランス大統領ニコラ・サルコジを批判した、『サルコジとは何の名前か』(Badiou, *De quoi Sarkozy est-il le nom?*; *Circonstances*, 4, Les nouvelles éditions lignes, 2007. 日本語訳版、『サルコジとは誰か? 移民国家フランスの臨界』、榊原達哉訳、水声社、二〇〇九年)が、哲学書としては異例の売り上げをみせて以来、少なくとも二、三年の表面的現象だけをとりあげるなら、テレビジョン、ラジオなどのメディアに頻繁にかつぎだされており、「フランス

文化の批判的担い手」として、スペクタクルに消費される役割を多分に演じている、または、演じさせられている。

一九六八年前後、フランスの毛沢東主義(マオイズム)には、他国同様、いくつもの潮流があった。主なものを挙げ、バディウの位置を標定しておく。

「プロレタリア左派(GP)」(一九六八—一九七三)は、おしやれな装いのマオイズムを標榜し、文化人・芸術家らの受けもよく、後年、知識人として権勢をふるう者が多数属していた。日本において知られている名を挙げれば、言語学者のジャン・クロード・ミルネール、ラカン派精神分析の衣鉢を継いだジャック・アラン・ミレル、イスラーム哲学研究者のクリスチャン・ジャムベ、『新哲学者』の代表格アンドレ・グリュックスマンなど。また一連の毛沢東趣味の作品を撮った映画作家ジャン・リュック・ゴダールなども、GPに大いにかぶれていたふしがある。この連中は、政治が厳しい時期を迎えたとき、マ

最後の革命? 解題にかえて (松本潤一郎)

オイスムを捨て、ある者はシオニズムに、ある者はイスラーム神秘主義に、ある者はテレヴィジョンでおしやべりする文化業界人に、ある者は現フランス大統領ニコラ・サルコジの御用学者へと、はなやかな転身を遂げた。「フランス毛沢東派内の異質な流れについて」と題されたインタビューでバディウは、GPの特徴として、「マオイスムはきわめて迅速に状況を引っくり返せる位置にあるという、歴史の流れに対する性急な誇大妄想」、「文革の意義はイデオロギーと個人の再教育を命令したことにあった、現実から遊離した極度のイデオロギー化」、そして（共産主義ならぬ）「共同体主義」の三点を挙げている。

GPの他、「フランス・マルクスレーニン主義共産党（PCMLF）」（一九六七年設立、その後も紆余曲折を経て名前を変えつつ継続）がある。PCMLFは中国共産党の方針に忠実に、ソ連追従のフランス共産党を批判し、正しい、または真の「党」に固執する、前掲インタビューのバディウに言わせれば、「旧き善き共

産党の再建を目指す」グループである。これは日本で一九八〇年代あたりから現われてきたと思しい語彙でいうところの、いわゆる「旧新左翼」に相当するだろう。すなわち、一九六〇年安保闘争前後における左翼運動の台頭以降に出現し、「六八年」前後をおそらくは頂点として、七〇年代のさまざまな意味一方向における暴力の席巻へと収束していった「新左翼」を、左派が巨大な勢力であった時代を回顧（遡及）する視線によつて、二度目の生——後述するクリスティン・ロスの言葉を借りれば「事後の生」——を授かり、かろうじて生き延びているであろう「新左翼」である。

これ以外に、一時期マオイスムに接近していた、フィリップ・ソレルスやジュリア・クリステヴァを擁するテル・ケル・グループが、この国では名だかい。とはいえ、周知のとおり、ソレルスらはオリエンタリズムにおいてしか文革を捉えていない。そもそも連中が毛沢東思想に接近したのは六八年以降であり、政治実践的には、まったく無意味だった。ソ

レルス自身、後にユダヤ神秘主義やカトリックなど、さまざまに宗旨がえをくりかえしており、（訳者個人にとつては）憎めない人物であるにせよ、やはり審美的「なんちやつて毛沢東主義」であったことは否めまい。この国では中沢新一（一九五〇—）がこれに相当する、かもしれない。

宗教学を専攻していた中沢は、ネパールに渡つてチベット密教を文字通り実践的に学び、その成果をテル・ケル派の記号論を用いて巧みに再構成し（中沢はソレルスと交友関係を結んでいる様子である）、一九八〇年代以降、アジアはもとよりヨーロッパ、東欧などの文明を、文化人類学的視角から巨視的・微視的に論ずる多数の著作を発表し、この国の活字メディアを大いに賑わせてきた。

そこでの基本的論点は、言語においては容易にとらえがたい自然界における物質のさまざまな運動のなかへと、いかにして人間の身体をダイブさせ、生き生きとした認識を会得するのかという問いに、つらぬかれている。

この問いを固有の政治的領域へと掻い潜らせた試みとしては、とりわけ、『文藝』（一九九四年春号、河出書房新社）における、おそらくは中沢を中心として組まれた特集「毛沢東、百年の孤独」に掲載されたいくつかのテキスト、また同年に出版された『はじまりのレーニン』（岩波書店）が、さまざまな意味において、重要である。そこでは政治的实践は身体と密接に関わるものと理解されており、記号論とはいうものの、これは言語に全てを還元するといった発想とは似て異なる試みであった。かくして、密教的と云ってよいのか秘教的と云ってよいのか浅学な訳者にはわからないが、中国古代哲学にも通底するかのごとき非言語的神秘に包まれた自然⇨物質の運動への一体化が、毛沢東の思考に見出されており、またレーニンに関しては、その一体化は、ヤークブ・ペーメの神秘主義に連なる系譜において、理解されている。

括弧つきとはいえ「唯物論者」を名乗っていたレーニンと毛を神秘家として提示するという、このいかがわしさが、訳者にとつて、中沢氏の途方もなく誘惑的⇨詐欺師的な魅力にほかならない。なんちやつと形容しなくなるゆえんである。

とはいえ、ここ二十年ほどの中沢氏は、身体実践の宗教的過激化の方向を追求せず、むしろ、依然として理数系または科学哲学由来の煙に巻くかのごとき妖しげな語彙を駆使しながら、いかがわしい議論を組み立てつつ（日本版「サイエンス・ウォーズ」を引き起こしかねないか？）、ゆるやかな共同体の構成と、そこにおける自然との穏やかな「共生」（一）を目論んでいるかに、訳者の眼には映る。この点ではむしろ、GPについてはバディウが述べた「共同体主義」の形容の方が、ふさわしいのかもしれない。

UCFML設立にあたってバディウに協力したのは、元GPのナターシャ・ミシエルとシルヴァン・ラザルスだった。三人は後の「政治組織」創設においても、協働している。UCFMLは、GPと異なり、「革命」を性急（プチブル急進主義的？）には求めない——革命は、**命は、宴ではない！**——。またPCMLFとは異なり、「（前衛）党」を絶対化することもなく——「P（党）」ではなく「U（同盟）」——。先のインタビュでバディウは、「われわれが実践してきた毛沢東主義の本質的な点」を、またしても三点に要約している。（一）「つねに民衆との絆を保つこと。知識人にとつての政治とは社会の中への旅であつて、閉じられた部屋の中での議論ではありませぬ。政治活動は工場や仮設所における労働と定義されるのです。それはいつも、現実の民衆の生活のまっただなかで、政治組織をつくりだすことでした」。（二）「ブルジョワ国家の設えた制度には参加しないこと。因習的な取引関係や選挙機構にわれわれは反対してきました。いわゆる官僚を斥け、選挙には行きませんでした」。（三）「性急

1) “Badiou: On Different Streams Within French Maoism”, <http://kasamaproject.org/2008/11/03/badiou-on-different-streams-within-french-maoism/>にて閲覧可。同インタビューは、Eric Hazan, *Changement de propriétaire : la guerre civile continue*, Paris, Éditions de Seuil, 2007. に収録されたものを、David Fernbachが英語訳した。

にじぶんたちを党と呼ばないこと、旧来の組織形態を採用しないこと。われわれは現実の政治過程に密接しつづけていなければならなかったのです」。

社会学者の大澤真幸は、現代の若者は左翼に憎しみを抱いている、それは左翼が「安全な場所」から「弱者」に「同情」しているからだ、といっている^②。

だがそれはちがう。少なくともバディウたちは、安全な場所から弱者に同情などしていない。そこには大いなる「経験交流」があり、「じぶんさがし」(小熊英二)ならぬ、「じぶん」からの離脱がある。分業と官僚化と同情(という名の愚弄)から真に身を挽ぎ離そうとする、「魂にふれる」人間を根底から変革する「(革命)の、具体的実践がある。この点を看過してバディウを「セクト主義」呼ばわりする言説があるが、これはあきらかに誤っている。

(またこの点とも関わって、訳者はながらくバディウを、「出来事」(ここでは革命)をフェティッシュ化しつつ、そ

の奇蹟的な到来を待ち侘びる「ドグマティック」な「神秘主義者」といったイメージで暗黙裡に捉える傾向をもっていたことを認めざるをえない。今回の訳出作業を通して、そのようなイメージをあらためた。なお、このように歪められたバディウ理解を正す書物として、Bruno Bosteels, Alain Badiou, une trajectoire polémique, Paris, Éditions la fabrique, 2009.を参照されたい。バディウの思想形成の過程を丹念にたどった好著である。)

社会学者と人類学者の相違を、文化人類学者の小田亮は、たとえばホームレスを「調査」するというような場合、人類学者は実際に「住み込み」を行うのに対し、「絶対とは言いませんけれど」と慎重に留保を表明した上で、社会学者は「支援者として「通い」のインタビュールに行くという違いが出てくる」というように、説明している^③。

訳者は、ここで比喻を通して説明を与えられている「人類学anthropologie」を、小田氏の議論の文脈から切りはな

し——したがって以下の議論は訳者の責において為されるものであり、小田氏とは無関係である——、上記のような発言を行う人間が自称する意味における「社会学」をも含めた、広義の「人間(の)学science humaine」に対立する思考として、とらえてみたい。すなわち、産学協同その他の名において人間を、剰余価値を産出する対象または客体と見做してさまざまなかたちで寡奪・消費する、たとえば「安全な場所」から「弱者」に「同情」しているふりをしながらそれらをじぶんの「業績」や「出世」へとカウントしているのは、まさしくこのような「社会学者」をも含めた「人間(の)学」、ときに「人文科学」とも呼ばれる権力ではないだろうか。

これに対し、小田氏の議論に触発された訳者が少なくともここで提示してみた「人類学」は、人間を対象||客体に定めて「じぶん」の保身と出世に利用するのではなく、逆に集合的に主体化する実験において、「人類」の新たな経験を創出する、そうした実験を指すだろう。そ

のかぎり、小田氏の思惑を裏切つてしまうにせよ、訳者は、バディウ固有の意味での「マオイスト」を、この意味での「人類学者」の一形象でありうる、言っておきたい。人間（の）学ではなく、この意味での人類学を！ 認識を具体的実践において検証し、翻つては実践から認識を根本的に問いなおし、ふたたび情況を変革するための認識へと鍛えあげつづける螺旋状の活動こそ、人類学の名にふさわしいと、訳者は考えるからである。

このような螺旋状の活動の一端を示す、ある印象的な証言に、訳者は出会った。本誌創刊号（二〇〇八年一〇月、特集「1968」）にその一部が訳載された（内野儀訳・解題）、クリスティーン・ロスの『六八年五月およびその事後の生』（Kristin Ross, *Mai '68 and Its Afterlives*, Chicago, University of Chicago Press, 2002.）のフランス語訳版を読んでいたときのことである⁴。それは、シトロエンで働いていたジョルジュという名の労働者による、工場にマオイストたちがやってきたときの、回想である。それがGPだった

のかPCMLFだったのか、はたまたUCFMLだったのか、浅学で怠惰な僕は、たしかめていないのでわからない。でも、そこにはたしかにフランス毛派のある側面が描きだされていると信じた。 「トロツキストたちもきました、でもマオイストとはちがいました（…）、トロツキストは、「労働者は搾取されている、なぜなら……」、その後マルクスの『資本論』の該当箇所かなにかを引用したピラを持ってやってきたのです。おそろしく理屈っぽくてね、ちんぷんかんばんでしたよ！ マオイストは逆でした。私たちにいろいろたずねることからはじめたんです。彼らはなにも知らなかったのです、私たちが彼らに話しかけるまでは。彼らは理想やピラを持ってやってきたのではありませんでした。私たちの言葉に耳をかたむけようとし、そしてその言葉をもとにして、ともにピラをつくったのです。私たちは心底からおどろきました……」⁵

マオイストだけでなく、その他おおくの流れから形成された「六八年」の多様

- 2) 大澤真幸、「左翼はなぜ勝てないのか（上）自己陶醉に映る弱者への「同情」（「論壇時評」、『中日新聞』、2008年7月29日付）。「左翼はなぜ勝てないのか（下）資本主義に勝る普遍性を示せず」と合わせて、<http://www.k4.dion.ne.jp/~yuko-k/adagio/sayoku.htm> で閲覧可。「勝ち負け」で事態を捉える点からしてすでに、十分に汚らしく卑劣な発想である。訳者としてはむしろ、「この社会学（者）はなぜ負けないのか？」と問い返しておきたい。その答えは、いうまでもなく、「権力にとって都合がよいから」である。
- 3) 小田亮、「真正な社会の思考としての人類学」、『KAWADE道の手帖 レヴィ＝ストロース』、河出書房新社、2010年、43ページ。
- 4) Kristin Ross, *Mai 68 et ses vies ultérieures*, Bruxelles, Éditions Complexe, 2005.
- 5) Ibid., p.113. 傍点引用者。この発言は、精確には Michèl Manceaux, *Les Maos en France*, Paris, Éditions Gallimard, 1972, p.77. における引用の再引用。

なうねりを、後に改竄されたその「事後の生」にいたるまで追ったロスはこの労作を、たくさんの人に読んでもらいたいと思う。

アナキズムではなく、党でもない、固有の政治組織を模索するバディウの歩みは、現在もなお、継続している。

（近年のバディウがスペクタクル社会の消費財の一つにすぎないかどうかは、議論の余地もある。また、そもそも、先に引いたインタビューにおける、バディウ自身が要約したUCFMLの方針もまた、現在から遡及的に構成された総括にすぎないのではないかという批判も当然ありえよう。異議を唱える者との対話を、訳者は行なう準備がある。『悍』は、そのための場となるはずである。）
そして、彼はそれを今、あらためて、「共産主義」と呼ぼうとしているように思われる。この点について、バディウそしてスラヴォイ・ジジエクがイニシアティブをとって行われた討論会の記録、『共産主義の理念』*Idee du communisme, a*

Initiative d'Amin Badiou et de Slavoj Žižek, Les nouvelles éditions lignes, 2010.を、解題の冒頭で紹介した、ここに訳出した論考を収めてあるバディウ、『共産主義の仮説』ともども、参照されたい。

『共産主義の仮説』は、決して既存の知の枠組には収まらない政治的文書であり、訳者はいわゆる「知（識）」には還元されない〈活学活用〉の精神を以て、訳出を心がけた。バディウはすぐれた活動家であると同時に哲学者でもあるが、訳者の知る限り、彼は一度も知識人としてふるまったことはない。いわゆる哲学的な著作にあっても、彼は、他の哲学者たちの思考をたんに説明または解説するのではなく、また権威づけに利用するのでもなく、ただおのれの思考を提示するために、最大限の注意と尊敬を払いつつ、それら他の思考を、おのれの思考の圏内において共存可能なものとし——旧く、誤解を招きやすい言い方をすれば、「自分の言葉で語って」いる——、したがっておのれの主張を通すための議論を行っている。要するに、真の意味で、厳

密に哲学しているだけである。彼の主張内容はさておき、この姿勢——作風そのものからまなぶべきことはおおい。

文革には、今日、ある否定的なイメージが憑いて回る。しかし、「今日」とはいつ（から）なのか。「文革」にこの否定性を付与したのはだれか。さらに、そのことによつて、このだれかはいかなる利鞘を手にしたのか。また、一体だれにとって「文革」は否定的でなければならぬのか。この否定的イメージはいかにしてつくられたのか。

文化大革命は中国における一九六六年から一九七六年までの十年にかけて起きたのだと、わたしたちはつい漠然と考えてしまいがちである。しかし、それは国家装置（中国共産党）が公式に認めた支配的見解であるにすぎない。「文革」の期間（日付）を決定するのは国家ではなく、わたしたち自身である。この時期画定作業から、わたしたちは、やりなおさなければならぬ。さもなければわたしたちは、国家の課す規制にいつまでもと

らわれ、「思考する」ことができないまままである。国家や既成の知が与えた枠組の中で、延々と気楽に、けつきよくはなかくよくおしやべりするだけでは、決して思考しているとはいえない。むしろ、この枠組の外に抜け出すところが「思考する」ことである。その意味で、思考とは必ずしもいわゆる「知」——とりわけ上述した意味での「人間の学」——と等しくはなく、また、いわゆる「実践」と対立することも決してない。思考するのは、既存の知や制度、自明と思われていた諸々の前提や条件にとらわれた状態から、他ならぬじぶんがいかにして抜け出すかという試みである。バディウのここでの議論において、訳者にとつてきわめて重要と思われることの一つは、このよきな国家権力による抑圧、すなわち思考の制限作用に、力強く反攻している点である。

文革のきわめて重要な点は、この反攻を、国家と一体化した党自身が、大衆に行使することをゆるした点にある。それは、国家権力を握る党それじたいがみず

からの解体を企てるという、前代未聞の実験的側面を、もっていたのである。したがって、「文革」の時期を国家権力および権力とつるんだ御用学者的「知」の定めたそれとは離れたところで画定しようとするバディウの実験——思考は、まさしく文化大革命におけるもつとも生き生きとした命脈を、継承している。

みずからを解体すべき対象として指し示したにもかかわらず、あるいは、それゆえにこそ、この実験は中止された。国家という既成の枠組から抜けだそうとするこの実験は、実験を支える当の枠組（国家と一体化した党）そのものを、解体しかけたからである。この実験は、枠組（実験の諸条件）そのものの消滅においてのみ、完了する。それはほかならぬみずからが定めたことによつてみずからを消滅させるといふ、異様な逆説の化身であった。

本稿でバディウが述べる通り、国家という抑圧装置が「公共保全、自警団（私兵）、軍」などに対してもつ「疎かにできぬ役割」の意味を、「文革」という未

完の、したがって今なお継続中の実験を手がかりとして、今後、わたしたちは、あらためて問う必要がある。そして、そのうえでお、国家または主権の自己解体の方途を模索すること。これが、主権または国家装置が外部に可視化されることをやめ、個人の内部へと不可視的に浸透した今日の情況に措かれた私たちに、文革から伝えられた、依然として考えなおされつづけるべき、たいせつな課題である。

上述してきた意味でのUCFML的マオイズムをこの国において実践してきた活動家の一人として、『魂にふれる革命』（ライン出版、一九七〇年）の津村喬を挙げる（⁶）ことができる。ここでは具体的に述べる紙幅がないが、本稿訳出作業中、訳者は、津村の思考とバディウの思考のあいだ

6) 『革命の弁証法』（せりか書房、1968年）その他の著作を遺した哲学者の藤本進治や、本稿訳出にあたって教えられるところきわめて多かった『毛沢東最高指示』（三一書房、1970年）の編訳者でもある中国研究者の新島淳良らについては、訳者の勉強不足ゆえ、不当にも、ここで名を挙げることは、せぜにおく。

に、ある同時代性を、またその命脈が今日なお、ニーチェのいう意味で反時代的に保たれていることを、確信した。いつか、この二人を結ぶ線を引き、思考の星座を組み立てる作業ができればと思う。

本論文の宛先は、記号や隠語を遊び、

他人事のように文革その他について延々とおしゃべりしつづけるだけの御用学者ではない。本論文は、日本語を解し、おのれを規定する歴史を疎かにせず、そして他人事ではなく、ほかならぬおのれを変革する意志を備えた、いわゆる、「左」から距離をとる立場をも含めたすべての

革命的活動家・具体的実践者たちに、宛
てられている。

得

200

執筆者紹介（掲載順）

佐藤正人（さとう・しょうじん）

一九四二年オタル生まれ。三重県本所で虐殺された朝鮮人労働者（李基允・妻相度）の追悼碑を建立する会、紀州鉾山の真実を明らかにする会、米空母に反対する市民の会、海南島近現代史研究会の会員。

藤井幸之助（ふじい・こうのすけ）

一九六一年高槻市生まれ。在日朝鮮人史・民族まつり／マダン研究。神戸女学院大学非常勤講師。コリアン・マイノリティ研究会世話人。在日韓人歴史資料館調査員。アプロハムケネットワーク大阪（朝鮮学校友の会）事務局。編著書『ある在日コリアン家

族の物語 つないで、手と心と思い 絵と物語で読む在日100年史』（アットワークス）など。

小野俊彦（おの・としひこ）

一九七四年北九州生まれ。パートタイム労働者。未組織貧民。九州大学大学院比較社会学府単位取得退学（朝鮮戦争期の北九州における港湾労働社会史等を研究）。二〇〇六年に誰でも一人でも不安定でも入れる労働／生存組合「フリーターユニオン福岡」を組織、一〇〇三年三月脱退。エッセーに「プレキャリアート」に工作を」（本誌第二号）、「フリーター」から「民衆」へ」（本誌第三号）など。

崔真碩（ちえ・じんそく）

一九七三年ソウル生まれ、東京育ち、広島在住。記者／役者。広島大学大学院総合科学研究科准教授。テント芝居「野戦之月海筆子」の役者。編訳書に『季箱作品集成』（作品社、主な出演作に野戦之月海筆子『変幻痴戯城』（二〇〇七年七月東京、九月北京、主なエッセーに「影の東アジア」（『残傷の音』岩波書店）、「野戦之月海筆子になる」（本誌第二号）、「腑抜けの暴力」（本誌第三号）など。

太田直里（おおた・なおり）

一九七九年京生まれ。京都造形芸術大学で染織を

学びながら音楽活動をする中で、社会運動に興味をもつ。音楽で芝居に関わり、以降、自ら芝居を創ることを試みる。作・出演『あさやけやけて』（西部講堂）、井上讓と共同作・出演『夢がさめたら』（長居公園）、作・出演『夜光客』（ミック）。主なエッセーに「排除される者の表現」（本誌第二号）など。現在、野戦之月海筆子にて活動中。

高田里恵子（たかだ・りえこ）

一九五八年神奈川県生まれ。東京大学文学部、同大学院人文科学研究科博士課程修了。ドイツ文学専攻。桃山学院大学経営学部教授。著書に『文学部をめぐる病い』（ちくま文庫）、『グロテスクな教養』（ちくま新書）、『学歴・階級・軍隊 高学歴兵士たちの憂鬱な日常』（中公新書）など。

キム チヨンミ（金静美）

一九四九年大阪生まれ。三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者（李基允・裴相度）の追悼碑を建立する会、紀州釜山の真実を明らかにする会、海南島近現代史研究会の会員。東アジア史研究者。著書に『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』『水平運動史研究 民族差別批判』『故郷の世界史 解放のインターナショナルリズムへ』（いずれも現代企画室）など。

キム・ヨンイル（金泳逸）

一九八三年東京生まれ。元・模索舎々員。フリーター全般労働組合議長。よこはまシティユニオン執行委員（専従）。アナキズム文献センター運営委員。

アナルコ・サンディカリスト・ネットワーク東京に参加、自らが加入している組合に限定せず労働者のネットワーキングに取り組んでいる。

玉川晴野（たまがわ・はるの）

大阪在住。在日韓国人三世。アルバイトや派遣社員としては、金の続く限りひきこもり、金が尽きたらまたバイト、を繰り返す生活をしています。

「花猫ぶろぐ」<http://hatena.ne.jp/hananeko51/>
「花猫がゆく」<http://hananeko.hanamicake.com/>

吉田一平（よしだ・いっぺい）

一九七六年京都生まれ。フォークシンガーとして地元のライブハウスを中心に活動。「対テロ戦争」に抗議するための音楽イベント「反戦ミュージック」を企画、二〇〇四年・二〇〇五年には京大西部講堂でも開催。その後「反戦と生活のための表現解放行動」にてサウンドデモの一翼を担う。二〇〇八年木の根にてバンド「Radical Tea Party」として「O.G.三里塚ライブ2008 Return of GENYASAI」に出演。論文に「音楽と空間の弁証法」「サウンドデモ」「排外主義に抗する」など。

千坂恭一（ちさか・きょうじ）

一九五〇年大阪生まれ。思想史。本誌編集委員。著書『歴史からの黙示』（田畑書店）、共著『ドイツ・ニューシネマを読む』（フィルムアート社）、論文に「総破壊の使徒バクニン」「ニーチェ、悲劇の誕生とアリアドネ」「シユティルナーと物象化論」「シェーンベルクとフアジズム」「エルンスト・ユン

ガーの体験」「蓮田善明・三島由紀夫と現代の系譜」「一九六八年の戦争と可能性」（本誌創刊号）、「内的体験としての暴力」（本誌第三号）など。

アラン・バディウ（Alain Badiou）

一九三七年モロッコのラバトに生まれる。哲学者、劇作家、小説家。高等師範学校（ENS）に学び、パリ第八大学、国際哲学学院などで教鞭をとり、現在も執筆活動を続ける。著者に「主体の理論」「存在と出来事」「諸世界の諸論理」（いずれもスイエ社）など。日本語訳書に『ドゥルーズ』『倫理』『聖パウロ』（いずれも河出書房新社）、『哲学宣言』『世紀』（いずれも藤原書店）、『ベケット』『サルコジとは誰か』（いずれも水声社）など。

松本潤一郎（まつもと・じゅんいちろう）

一九七四年東京生まれ。同人誌『ゲストハウス』寄稿者。翻訳書にアラン・バディウ『倫理』『聖パウロ』、スラヴォイ・ジジエク『イラク』『ロベスピエール』『毛沢東』、アルフォンソ・リンギス『異邦の身体』、ピエール・クロソウスキー『かくも不吉な欲望』（いずれも共訳、河出書房新社）、バディウ『世紀』（共訳、藤原書店）、ピーター・ホルワード『ドゥルーズと創造の哲学』（青土社）など。論考に「自然とその倒錯 黒田喜夫の離接的综合」（『ゲストハウス』二〇一〇年一月臨時増刊号）など。『ゲストハウス』近刊号に「ひめやかな奇跡 キパリングのいくつかの短編に触発されて」を掲載予定。